

自治体維新

首長インタビュー



宮崎県知事

河野 俊嗣 氏

この・しゅんじ 1964年生まれ。広島県呉市出身。88年に東京大学法学部卒業後、旧自治省（現総務省）入省。ハーバード大ロースクール卒。総務省自治税務局企画官、宮崎県総務部長、副知事などを経て、11年1月に宮崎県知事に就任。サッカー、トライアスロンなどスポーツを愛するかたわら、年末には地元の合唱団に参加し「第九」を歌うクラシック音楽ファンで、とりわけオペラ鑑賞を好む。酒は何でもたしなむが、ワイン好き。

アジアに農産物輸出、食の王国へ

東国原英夫前宮崎県知事の後を継ぎ、2011年1月に就任した河野俊嗣知事。初登庁日に県内で鳥インフルエンザの発生を確認、同じ月の下旬には霧島連山・新燃岳が約300年ぶりの大噴火をするなど災害が相次いだ。半面12年には和牛の五輪と呼ばれる「全国和牛能力共進会」で宮崎牛が連覇を達成。1期目後半の13年からはフードビジネス推進など「攻め」の県政に転じ、市町村との関係を重視しながら県経済の浮揚を目指している。

口蹄疫の苦痛は畜産新生をもたらした

宮崎県は2010年の家畜伝染病「^{こうていえき}口蹄疫」の爆発的感染で、牛と豚の合計約30万頭を殺処分するという苦しい経験をした。

知事選には口蹄疫からの再生復興を掲げて出馬し、当選後はスピード感をもって各種対策に取り組んできた。その中で、口蹄疫終息宣言から2年を迎えた昨年8月、「忘れない そして前へ」と題した記録誌を作成。感染した牛や豚の特徴、防疫従事者数の推移、現場での対応などを分かりやすく実態を示した。改訂した防疫マニュアルなども添付して国、各都道府県、獣医系学科のある大

学などに配布した。口蹄疫とは何なのかを全国に向け伝えるのが我々の役目で、防疫体制の強化に役立ててもらいたいと考えている。

そうした中、昨年10月、5年に1度開催され和牛の五輪と呼ばれる「全国和牛能力共進会」で宮崎牛が大会2連覇を果たした。県民に自信と誇りをもたらす大きなきっかけになった。畜産農家の数や飼育頭数は口蹄疫発生前の6～7割程度まで回復した。経営再開を目指す農家はほぼこれで出そろったのではないかと考えている。13年度には向こう3年間の「畜産新生プラン」がスタートする。畜産業界が迎えた思わぬ大ピンチの中で、これまでの経営などに関する問題点を洗い出し、工夫すべき部分が鮮明になった。危機にあったから

こそ見えてきたともいえる。「生産性の向上」「生産コストの低減」「販売力の強化」「畜産関連産業の集積」といった諸課題に対し、新たな方策をまとめ、チャンスに転化させていく。

口蹄疫の後処理としては、殺処分した牛、豚を埋めた埋却地の問題が残っている。12市町村にまたがり、計100ha近くにのぼる埋却地は3年間発掘が禁止されているが、4月から順次、発掘が可能になる。農林水産省の13年度予算で埋却地の再整備費用が盛り込まれた。もともと優良な農地だっただけに、復旧作業を出来る限り進めていきたい。



宮崎牛の連覇で記者会見する河野知事

香港・台湾・シンガポールに橋頭堡

口蹄疫は畜産業界だけでなく観光業界、小売業界など県内経済に多大な悪影響をもたらした。13年度から経済を浮揚させるカギとなるフードビジネス、アジア市場の開拓など6分野に戦略的に取り組み、成長産業を育成する。

基幹産業の農業では、これまで肉、水産物、野菜、園芸産物のいずれをとっても品質の高い産品を生産してきた。ただ、ともすればいい農産物を作るといことばかりに力を入れてきたきらいがあったかもしれない。いいものを作ることだけで満足していたともいえる。たとえば、いい子牛を作ってきたが、肥育された牛は松阪牛、神戸牛、佐賀牛などのブランド牛として高値で取引されてきた。典型的な素材供給型だ。逆にいえば、今後ののびしろ部分は十分にあるといえる。

よく引き合いに出すのは、農畜産物の出荷額が約3000億円で全国7位なのに対し、食料品製造業の出荷額は約2600億円で31位という数字だ。冷凍野菜、カット野菜など付加価値をつけて出荷する加工食品や、潜在需要が大きい高齢者施設向け食品に注力することで生産を伸ばしたい。

そうしたことを戦略的に組み立て、総合的な食関連産業（フードビジネス）を育てて「食の王国」を目指すのが「みやざきフードビジネス振興構想」だ。県内の産・官・学を挙げてネットワークを作り、人材の育成など基盤強化し、ビジネスを拡大させる。先ほどの話でいえば、生産側の都合ばかりを考えるのではなく、マーケットニーズを的確に把握して供給していくということだ。これまでの反省として大市場、とりわけ首都圏におけるPR不足がある。バイヤー、プランナー、コーディネーターなど外部の専門家の意見を取り入れ、販路拡大を図っていく。

アジア市場の開拓も戦略的な重点事業としている。香港に事務所を新設して拠点を確保。台湾、シンガポールなども含めたアジアでの食品見本市への出展なども行い、農産物の輸出支援の橋頭堡にする。東アジアとの交流やパイプを強化するため、現在ある台湾、韓国の定期航空路線以外の新規航空路線誘致を促進する支援事業にも乗り出す。

11年に国の指定を受けた「東九州メディカルバレー構想特区」も同様だ。宮崎県北部と大分県にまたがって医療機器産業の集積を図る内容で、大きく育っていくことが期待されている分野だが、アジア各国から技術者の受け入れを行っていく。アジアとの関係を深める上で種をまく事業となるはずだ。

記紀1300年イベント、恋旅キャンペーンも

古事記が編さんされてから昨年で1300年。日本書紀の編さんから1300年を迎える20年まで、宮崎県は神話のふるさととして「記紀編さん1300年事業」を展開、観光振興につなげようとしている。

口蹄疫、鳥インフルエンザ、新燃岳の噴火と災害続きで県民が苦しんでいた昨年、古事記編さん1300年を迎えた。何とか元気を出そうとしていたまさにその時、観光をアピールする絶好の機会が訪れ、ありがたかった。自分たちの土地や歴史の魅力を見つめ直すいい機会にもなった。島根県の「神話博しまね」などと比べ、取り組みが地味で目立たないなどといわれるが、まずは自分たちの宝を自分たち自身できちんと認識し、外へ向けアピールする。そうした動きがじわりと広がり始めていると感じる。

20年の最終年には文化の国体と呼ばれる国民文化祭を誘致する名乗りをあげた。神話と同様に県内には207もの神楽が県内各地域に伝承されている。中山間地域のコミュニティ活性化のためにも神楽の世界無形文化遺産登録も目指しているほか、宮崎県中部に前方後円墳など310基余りが集まる西都原古墳群の世界文化遺産登録も目指し、誘客につなげたいと考えている。

日向神話に関連しては恋愛や縁結びといった視点から「恋旅」というキャンペーンも展開している。ただ、こうした取り組みが一般の消費者、他府県民らに届いているかという別問題だ。自然環境の良さも含めてアピールするために、いろいろなアイデアや工夫をこらしていきたい。

前知事が極端に世間の耳目を集めることが多かっただけに現知事はアピール力や指導力に関し何かと比較されることが多い。

前知事はそれまでの経歴から知事就任後もテレビに数多く出演してアピール力をいかしていたのは周知の通り。私が就任してから県外の県人会に出席すると、「もっと宮崎をPRしてほしい」「最近テレビで話題にならず寂しい」などといわれたことがある。だが、あせって同じことをしようと思っていないし、それができないとダメということでもないと思っている。他府県の知事でもあつたことが出来ている人はいない。

私は国、県、市など行政については経験がある。知事選出馬の際に「対話と協働」を掲げたように、



プロ野球のキャンプには大勢の観光客が詰めかける

関係団体や市町村との連携を深めようと努めてきた。実際、様々な会合に出かけるが「こんな小さな会合に知事が来てくれたのは初めて」などとよくいわれる。きめ細かに対話を繰り返していかねばならないという考えだ。地元を大切に、「市町村重視」「現場重視」という姿勢でこれからも取り組んでいきたい。

発信ということであれば、観光振興で宮崎の海の素晴らしさを売り出す「波旅」キャンペーンを展開しているが、私の初めてのサーフィン体験をユーチューブで流している。日々の感想や経験をブログに記したり、フェイスブックやツイッターなども利用している。より多くの人々に宮崎のよさを知ってもらえるよう様々な形で発信を心掛けていきたい。

インタビューから▶▶

宮崎県は鉄道、道路の便が極めて悪い。県民気質は決して閉鎖的ではないのだが、他の自治体との比較や交流、競争という視点が欠落しているケースが少なくない。同時に、宮崎の持つ豊かさについての自覚も十分ではないようだ。その点で前知事はうってつけの派手な“広告塔”だった。河野知事は若さ、勤勉、生真面目を武器に怪しげな即効薬に頼るのではなく、地道に経済の活性化に取り組んでいる。ただ、ブレイクスルーには“いちずな強引さ”が時に必要だ。そんな場面がいつか訪れるだろうか。

(宮崎支局長 本田 寛成)